

磐城一高入試問題

国語(その一)

ア、水槽なんぞを食卓の上にのせるのが不潔でなんとなくいやに

最も適当と思うものを選び、記号で答えなさい。

武蔵野の春は小川の様から美しいはじまる。ここは、さじょうを閉じて来た。

その楽しみをいかねてか、ある日、親せきの男の子がことしもまた

おもだらが帰ってくる。りょうの結果は豊富である。ふな・もえび・め

だか・じょうなど、水槽は、かれいの巻鮭・鰯鰈で盛るような盛況

である。それを食卓の上へ、ありがたそうにすくとて喫さん。食事も長

いが、こどもの話はお長い。

か効い用事があつて、けさ帰らなければならぬことになっていた。

A あすが来る。男の子は待ちかねて派手起きる。たちまち昨夜の水槽

を思い出す。ふなが三四死んで一匹になっている。こともばしょげる。

それをつ年下のわたしの娘が、静かによく慰めている。男の子は、何

か効い用事があつて、けさ帰らなければならぬことになっていた。

揚土が男女ともに優勝

男の子と揚土が優勝した。
試合結果は次の通り。

四倉で木元教子講演会

四倉地区公民館連絡会 四倉町
16日 四倉公民館
講演会は市民文化教育講座
のひとつとして開かれる。テ
レビなどでおなじみの木元女史が
「現代の親子の生き方」を予
て、男女とも揚土が優勝した。

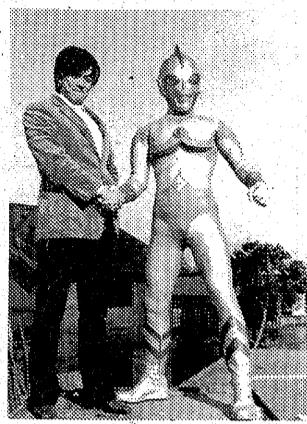
試合結果は次の通り。

○男子△決勝

△決勝

○女子△準決勝

△決勝



身長50cm、体重44,000tのウルトラマン80と矢の猛役の長谷川初範

ち や ん ね る 情 報



相愛の夫の客死を機会に、十八年のペリ晩じて切り上げて、梶道子(森光子)が帰郷した。その道子を空港に迎えたのは夫の弟、梶電機の専務・梶駿介(中村堅)だった。彼は道子の突然の帰國を、梶家の財産をねらう者として警戒の目で迎えた。

思いもかけぬ梶家の非情な扱いに道子は憤慨。生まれ育った東京の下町・人形町を訪れた。なつかしい町で、道子は幼なじみのつり船屋の忠八(堀井透)と再会した。忠八は妻町の売れっ子(池上春実)、理恵(藤田千尋)だった。忠八は、女房(朝丘雪路)を女房に再会した。

F-TVで現在放送中の「ウルトラマン80」(仮題)がそれ。

あとのウルトラマンが帰ってくる

【ウルトラマン80】現在のアニメから再び実写に「変身」

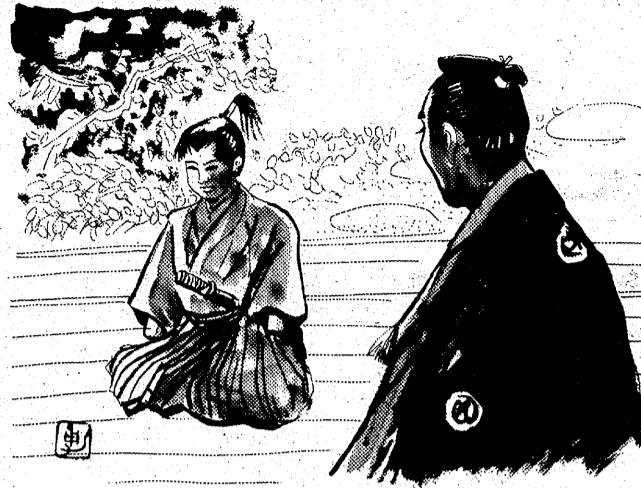
かつて熱狂的な隆盛の「ウルトラマン」を巻き起したワールドラン(00)の後番組として四月二日からスタートする「ウルトラマン80」が、F-TVで現在放送中の「ザ・

【ウルトラマン80】(仮題)

【ウルトラマン

生活のメモ

一年余が過ぎた。武助は奇跡的に命を取りとめた。彼を必要としたのかも知れない。若くたくましい生命力が大量の出血で奪われ抜いたのが知らない。しかし、もともと口数の少ない彼は、運命論的に言えば、まだ天は奇跡的に命をとりとめた。彼が必要としたのかも知れない。いつも迷ふ見つめ、一日中、一晩も寝抜けないのか知らない。



栄養クリームと成分

「春一番」は、高畠庄には、いつまでもあります。この春一番が、そのままやつくる季節です。

春一番に用心

土なべの扱い方は…



「かぎのシンチュー」

かぎは塩水で振り洗いし、バター大さじ一杯で三十秒ほどあいます。なべを火から下ろし、余熱でかぎが丸くふくれたところで白ぶどう酒とソーモン汁を振り、さるにとります。

スープなどにバター大さじ二杯を溶ぎ、玉ねぎのみじん切りをやわらかくなるまで三分間ほどいたます。これに小麦粉大さじ二杯半を振り混ぜて、魚のスープと牛乳を入れておきます。

ところみが出来たらマッシュルーム(または生じけ)を入れ、塩コショウ、化学調味料で味をととのえてから、かぎを入れ弱火でゆっくり温めます。

いわき市のアメ横“ダイユーゴルフ”が贈る

ゴルフ用品

スチールのねじれを超えた驚異の3.3度を実現!世界最高級品。

Grand Bigwin

フルセット ¥1,160,000 展示

ゴルフクラブ100セット大展示中!!

第一話

頼母、ご善政!

作・さとうもとかつ(泉)

創作少年葉隱れ

「大生懶(おおぶせ)の土地を」などと考えます」、「ふむ」。
「な、なん…」。
「ほ」、庭間に目をやった。山

大生懶は、津田の屋敷から約三キロ離れた隣藩と境を接している荒れ山である。武前が所有する土

木や雑草に覆われた何の役にも立

かずながらへこんでいるもうな

した希望をもたらした。

希望が工夫を生んだ。

手頃な細い立木を見つけては、

いつの思いで口で巻きついで、武

助はその作業を止めるが、

日もあると皮膚が破れ、血がとうと流れた。裏をぬぐって傷口を拭(ぬぐ)うしで包み、立木に細い糸をや

つとの思いで口で巻きついで、武

助はその作業を止めたが、

武前が叫んだ。庭を

ど、武前が語氣を高めた。

「今まで言わなかったが、たとえ

見つめたのは、ひとは武助の方で

気がした。それは、こゝわざかの

変化ではあったが、武助の胸の中

に、輪を作つて次々と広がつた。

二、「武助」

とつぜん、武前が叫んだ。庭を

ど、武前が語氣を高めた。

「今まで言わなかったが、たとえ

見つめたのは、ひとは武助の方で

気がした。それは、こゝわざかの

変化ではあったが、武助の胸の中

に、輪を作つて次々と広がつた。

三、「武助」

とつぜん、武前が叫んだ。庭を

ど、武前が語氣を高めた。

「今まで言わなかったが、たとえ

見つめたのは、ひとは武助の方で

気がした。それは、こゝわざかの

変化ではあったが、武助の胸の中

に、輪を作つて次々と広がつた。

四、「武助」

とつぜん、武前が叫んだ。庭を

ど、武前が語氣を高めた。

「今まで言わなかったが、たとえ

見つめたのは、ひとは武助の方で

気がした。それは、こゝわざかの

変化ではあったが、武助の胸の中

に、輪を作つて次々と広がつた。

五、「武助」

とつぜん、武前が叫んだ。庭を

ど、武前が語氣を高めた。

「今まで言わなかったが、たとえ

見つめたのは、ひとは武助の方で

気がした。それは、こゝわざかの

変化ではあったが、武助の胸の中

に、輪を作つて次々と広がつた。

六、「武助」

とつぜん、武前が叫んだ。庭を

ど、武前が語氣を高めた。

「今まで言わなかったが、たとえ

見つめたのは、ひとは武助の方で

気がした。それは、こゝわざかの

変化ではあったが、武助の胸の中

に、輪を作つて次々と広がつた。

七、「武助」

とつぜん、武前が叫んだ。庭を

ど、武前が語氣を高めた。

「今まで言わなかったが、たとえ

見つめたのは、ひとは武助の方で

気がした。それは、こゝわざかの

変化ではあったが、武助の胸の中

に、輪を作つて次々と広がつた。

八、「武助」

とつぜん、武前が叫んだ。庭を

ど、武前が語氣を高めた。

「今まで言わなかったが、たとえ

見つめたのは、ひとは武助の方で

気がした。それは、こゝわざかの

変化ではあったが、武助の胸の中

に、輪を作つて次々と広がつた。

九、「武助」

とつぜん、武前が叫んだ。庭を

ど、武前が語氣を高めた。

「今まで言わなかったが、たとえ

見つめたのは、ひとは武助の方で

気がした。それは、こゝわざかの

変化ではあったが、武助の胸の中

に、輪を作つて次々と広がつた。

十、「武助」

とつぜん、武前が叫んだ。庭を

ど、武前が語氣を高めた。

「今まで言わなかったが、たとえ

見つめたのは、ひとは武助の方で

気がした。それは、こゝわざかの

変化ではあったが、武助の胸の中

に、輪を作つて次々と広がつた。

十一、「武助」

とつぜん、武前が叫んだ。庭を

ど、武前が語氣を高めた。

「今まで言わなかったが、たとえ

見つめたのは、ひとは武助の方で

気がした。それは、こゝわざかの

変化ではあったが、武助の胸の中

に、輪を作つて次々と広がつた。

十二、「武助」

とつぜん、武前が叫んだ。庭を

ど、武前が語氣を高めた。

「今まで言わなかったが、たとえ

見つめたのは、ひとは武助の方で

気がした。それは、こゝわざかの

変化ではあったが、武助の胸の中

に、輪を作つて次々と広がつた。

十三、「武助」

とつぜん、武前が叫んだ。庭を

ど、武前が語氣を高めた。

「今まで言わなかったが、たとえ

見つめたのは、ひとは武助の方で

気がした。それは、こゝわざかの

変化ではあったが、武助の胸の中

に、輪を作つて次々と広がつた。

十四、「武助」

とつぜん、武前が叫んだ。庭を

ど、武前が語氣を高めた。

「今まで言わなかったが、たとえ

見つめたのは、ひとは武助の方で

気がした。それは、こゝわざかの

変化ではあったが、武助の胸の中

に、輪を作つて次々と広がつた。

十五、「武助」

とつぜん、武前が叫んだ。庭を

ど、武前が語氣を高めた。

「今まで言わなかったが、たとえ

見つめたのは、ひとは武助の方で

気がした。それは、こゝわざかの

変化ではあったが、武助の胸の中

に、輪を作つて次々と広がつた。

十六、「武助」

とつぜん、武前が叫んだ。庭を

ど、武前が語氣を高めた。

「今まで言わなかったが、たとえ

見つめたのは、ひとは武助の方で

気がした。それは、こゝわざかの

